

「立川村十二景」 を描いた馬場吉蔵と 寄贈された衝立「春秋花鳥図」



写真1：馬場吉蔵肖像
(写真：衝立寄贈者所蔵)



写真2：「立川村十二景」(個人所蔵、当館寄託)
より「立川駅前砂川街道」の東屋

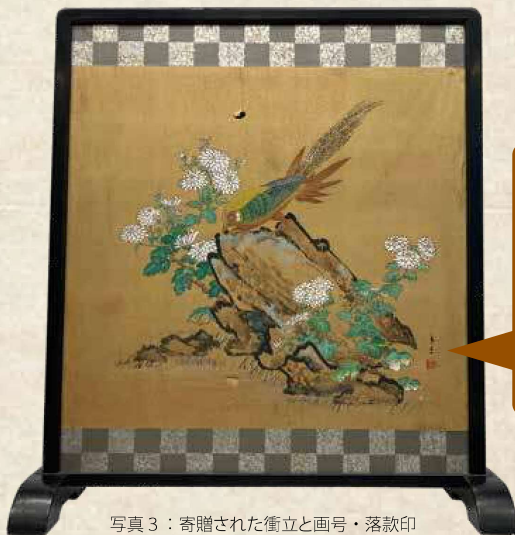


写真3：寄贈された衝立と画号・落款印

皆さまは「文化財」と聞かれてどのような印象を持たれるでしょうか。とても古くてお堅い、竹革(ていさく)のようなもの？いえいえ、もっと身近で面白く、魅力的なものです。立川市の指定文化財は数多くありますが、今現在、絵画作品は「立川村十二景」のみです。今回はこの「立川村十二景」とその作者・馬場吉蔵、そして新たに寄贈いただいた資料についてご紹介します。

馬場吉蔵(明治30〔1897〕年3月14日―昭和49〔1974〕年5月25日)(写真1)は立川村下和田(現在の錦町5丁目付近)に父・甚兵衛、母・ヨ子の間に次男として生まれました。馬場家は初め、煙

草の製造・販売業を営んでいましたが、明治22〔1889〕年に甲武鉄道(現在のJR中央線)が開通すると、立川駅前に移転し、旅館「東屋」(後の「東雲閣」)を開業しました。画才のあった吉蔵は明治大学商学部で学業に励みながら、日本画家・佐竹永陵(さたけえいりやう)に師事し、日本画を学びました。長兄・福太郎が早世すると、大学を中退して家業を継ぐこととなりますが、あくまで旅館業・骨董業を生業として、一人の郷土画家として画業に励みました。東屋は、吉蔵が描いた「立川村十二景」の「明治三十六年時代 立川駅前砂川街道」(写真2)にも描かれています。立川駅から北に延びる街道(現在の北口大通

り)を描いたもので、現在でこそ駅前北口大通りは車や人々の往来が激しい所ですが、この絵が描かれた頃はそこまでの賑わいはなく、添え書きによれば「道路とで大小供が石けり遊びなどして遊んで居た程で道を通る人もまばらで」とあります。絵のなかには雨の中おどけて走る子どもたちの姿も描かれています。吉蔵は師である佐竹永陵から一字をもらい「恒陵」と号しました。「立川村十二景」はすべて画号「恒陵」で描かれています。戦後になり「永芳」と号しましたが、吉蔵は戦後の状況を憂いて「恒陵」は荒涼に通じ、語呂が悪いと考えていた(三田鶴吉「馬場吉

蔵氏を語る」(「日野の渡し」所収)といえます。さて、今回ご寄贈いただいた資料は大型の衝立「春秋花鳥図」(写真3)です。描かれている題材は、秋が白菊と鶏、春は春蘭と千鳥笹でしょうか。画号は「永芳」、落款印には「錦谿」と見え、昭和40〔1965〕年ごろの作品ではないかと考えられます。吉蔵の孫にあたるこの資料の寄贈者は、とても優しく穏やかな身近なお祖父さんで、煙管を吹かしながらもつばら絵を描いていた姿がとても印象的であったといえます。

歴史民俗資料館では企画展「新収蔵品展」を8月31日(日)まで開催しています。

立川市教育だより「たっち」最終号のお知らせ

立川市教育だより「たっち」は、このたび、市政情報における広報のあり方を検討する中で、第57号をもちまして、最終号となりました。

平成15〔2003〕年の創刊以来、ご支援・ご協力をいただき、また、多くの方々にご愛読いただきありがとうございました。

今後は、毎月2回、10日と25日に発行している「広報たちかわ」や市のホームページ等で、教育に関する情報をさらに充実させ、掲載してまいります。

引き続き、ご愛読のほどよろしく願います。

立川市教育委員会

ご紹介した衝立のほか、掛け軸二幅、市指定有形文化財「立川村十二景」の「立川駅前砂川街道」、旅館「東雲閣」で使用されていたお椀なども併せて展示します。文化財や当館収蔵資料の魅力を発見しに、資料館へ足を運んでみませんか？創刊とともに20年以上連載が続くこのコラムも最終回となりました。執筆にあたり、資料や情報をご提供いただいた方々に、この場をかりて感謝申しあげます。ありがとうございました。

歴史民俗資料館(生涯学習推進センター)
文化財係 ☎(525)0860